

先週金曜日、寝屋川（ねやがわ）で用事があった、京阪電車で寝屋川市駅から京橋に帰ったんですが、電車の中、殆どの方がマスク。僕もマスクしたい。だけど売ってない。頂戴みたいなの。

私はその時マスクしてて、空いてる席があったので座ったら、隣のサラリーマンがスマホで何か見てる。エアポットを耳にさして。「ええ歳した大人が、座るや否やゲームかい」と、見るともなしに見たら、私のYouTube なんですよ。あっと思って。ところが、マスクしてるから私と分からない。何か、気づいて欲しいなと。今更マスク外すって、わざとらしくない？「高原です」と言いそびれて、ソワソワして。

京橋に着いた時、彼はまだ淀屋橋（よどやばし）まで行くのでしょ、もう降りないとダメなので、ちょんちょんと肩つついて、マスク取って、「ええこと、言うてるやろ」言うて、降りて行きました。のけぞって、目が点になってんねん。その時「勝った！」って。「何が勝ったんや」と思うんですけど。

マスクは表情が分からないので、普段はあれなんですけど、今持っている方は遠慮せずに、どうぞマスクなさって下さい。ない方は多分買えなかったんだろうと。ほんとは、皆さんは黙って聞いて下さるので、この時間帯に皆さんから飛沫が飛ぶ事はなくて、私がマスクすれば1番効率的なのかも分かりませんが、お許し頂いて、余り長くならないように、一緒に考えたいと思います。

ざっくり黙示録シリーズ。今日は9回目。いよいよ「患難時代」に突入する序章と言うべき章が黙示録4章と5章なんですね。今まで、これからの世界がどうなるか、という事を前もって語っている「預言書としての黙示録」「聖書預言」という事で紹介して来ましたが復習です。

時間の座標軸。ある時に患難時代が始まります。患難時代は7年間で、人類歴史の中で最も恐るべき時代。最初の3年半で世界人口が半分になります。もし70億いたら35億人に減ってしまう。

この恐るべき時代に入る前に、イエス・キリストが空中まで来て、クリスチャンたち、名目上のクリスチャンじゃないですよ。教会行ってるとか、洗礼受けてるとか関係ない。本当に救われているクリスチャンたちを天に引き上げます。これが「携挙（けいきよ）」。生きているクリスチャンだけではなく、これ以前に亡くなったクリスチャンたちは、栄光の体によみがえらされて、一気に天国に行くというわけです。

携挙の前に、7つの教会時代があったという事で、今までヨーロッパ州を中心にしながら、このシリーズで紹介して来ましたね。この7つの教会時代についての預言が黙示録2章と3章です。

今日は4章。教会時代が終わった後、天に連れて行かれた教会が、天でどんな事をしているのかという「天の光景の描写」が4章なんですね。

新改訳聖書2017版の496ページ。496という数字も見えないという、悲しいですね。僕もこれ、ハズキルーペ。去年買った物の中のベスト3に入りますわ。めちゃくちゃ見える。そんな宣伝は別にいいんですけど、これがないと見えないので着けます。

黙示録4:1 その後（のち）、私は見た。すると見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラッパのような音で私に語りかけるのが聞こえた、あの最初の声があった。「ここに上（のぼ）れ。この後（のち）必ず起こることを、あなたに示そう。」

その後、私は見た。その後はギリシア語で「メタ・タウタ」。「メタ/～の後に」「タウタ/その」。

「メタ・タウタ/その後に」。この言葉は、今までの話題を転じて、別の話題に行く時に出て来るんです。

その後って、どの後かという、2-3章で7つの教会の事を話しましたが、「この教会時代の後に」という事。教会時代の後に、別のものを見る。別の話題に転じますという事です。

開かれた門が天にあった。天という言葉が出て来ますが、聖書には天は3つあります。

第1の天は大空。鳥が飛んでいる領域。第2の天は宇宙。天体が存在している領域。この天は第3の天で、別名「パラダイス」と紹介されています。これは神の王座がある所で、いわゆる「天国」と言う時は、大空や宇宙を指すのではなく、より高次元な世界・神の王座がある所。そこを第3の天と言うのです。

第3の天の光景を見た。そこに開かれた門があった。今天国がどんな様子なのか、地上からは絶対に見えません。天と地が離れている。絶対に分からないのですが、この時、ヨハネは預言者として特別に、「開かれた門が天にあった。見えた」と書いてあります。見とれていたんですね。

すると、ラッパのような音で私に語りかけるのが聞こえた、あの最初の声があった。「ここに上れ。」天に開かれた門があって、それを見ていると「ここに上れ」と聞こえたのですが、それは聞き覚えのある声でした。2回目の声。黙示録 1:10 私は主の日に御霊に捕らえられ、私のうしろにラッパのような大きな声を聞いた。この声です。

ラッパのような大きな声とは、黙示録 1:12-13 私は、自分に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。また、その燭台の真ん中に、人の子のような方が見えた。人の子のような方はイエス・キリストの事でしたね。既に1章でやりました。

つまり、ラッパのような大きな声で、「ここに上れ」と呼びかけてくれたのはイエス・キリストです。キリストがヨハネに「ここに上れ。」ここは第3の天。

ヨハネの肉体はパトモス島にいる。しかし、その肉体を持ってか、そうでないのか、恐らくそうでないと思いますが、彼の霊が引き上げられて、第3の天に上ったと書いてあるんですね。

黙示録 4:1 その後、私は見た。すると見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラッパのような音で私に語りかけるのが聞こえた、あの最初の声があった。「ここに上れ。この後必ず起こることを、あなたに示そう。」

この後必ず起こることを、あなたに示そう。「この後/メタ・タウタ」がまた出て来ました。1つの節の中に「メタ・タウタ」が2回。1回目は今までとは違う話題に転ずる時の「その後」。しかし、ここでの「この後/メタ・タウタ」はもっと深い意味があります。

実は、黙示録全体は3つに分ける事ができます。

黙示録 1:19 それゆえ、あなたが見たこと、今あること、この後（のち）起ころうとしていることを書き記せ。

①あなたが見たこと（過去形）、すなわち1章の栄光のキリスト。②今あること、すなわち7つの教会時代の事。③この後（メタ・タウタ）起ころうとしていること。教会時代の後に起ころうとしている事は患難時代です。患難時代がこの後（メタ・タウタ）に起こる事だとして語っている。

4章に戻って、「ここに上れ。この後必ず起こることを、あなたに示そう。」患難時代に地上でどんな事が起こるかを見せるために、ヨハネを天に引き上げたのです。「メタ・タウタの実質的な内容を、あなたに示そう」というわけですね。

ところが、ヨハネの霊が上げられて見た実際の光景は、これから地上で始まる患難時代の様子ではなく、天の様子でした。地上世界で起こる事を詳しく見る前に、まず天上世界で実際に何が起こっているかをここで見せる。4-5章は「天国がどんな状態か」を言っているのです。

私ね、行った事がないのよ。天国に。行った事がないのをどう説明すんねんと。いや、書いてあるから、それを説明するんですけど、読みながら、話をしながら、ものすごい限界を感じています。それよりもゴグとマゴグの方が、私にはリアル感があるんです。あまりにも手が届かない事を、無理にでも説明しようとするので、説明しようとするほど説明できてないという実感が付きまとう。でも、書いてあるからやります。

これから地上でどんな事が起こるかを説明する前に天の情景を語った理由は、地上で起こる大事件を決定付けているのは天の決定だから。患難時代の始まりは人間が決めるものではありません。

今までの人類歴史・世界史を見ると栄枯盛衰。地方のちっぽけな国でしかなかったのが、見る見るうちに世界帝国になったかと思うと、世界帝国だった大きな国が、あれよあれよと言う間に食い潰されて滅亡して行く。なぜ大きな国がしぼんだり、小さな国が大きくなったり…、ヨーロッパ・中東の歴史を見るとそういう事がありますよね。

実は、イスラエルを中心とする世界帝国の覇権については、聖書に全部預言されています。地上で色々な国が興ったり倒れたりするけど、その全部が天の決定に基づいて、地上で行われているのです。

革命という言葉、産業革命・フランス革命・共産革命・IT革命。色々な革命の「命」は命令の「命」で、「上なる方・天の神の意思」という意味があります。革命の「革」は牛革・豚革ではない。「変わる」という意味です。革命はなぜ起こるのか？「天の神の意思が変わったので革命が起こった」という意味で革命なんです。これを考えたのは中国人。

今まで羽振り良かった国が突然ドンと落ちたり、今まで地味で見向きもされなかった国が急に強くなったり。人間の力を超えた何らかの天的な力・決定が働いているのではないかと。天の神の意思が変わったので、捨てられた政権は、今までの歴史がいくら長くても過去のものだ。

中国ではこれを逆に悪用して、どんなにあくどい方法を使っても、政権を倒したら「天の意思だから倒せたんだ」と言える。どんな汚い手段を使ってもやります。だから、革命には非常に醜い話が多い。

いずれにしても、この思想の背景は「人間の自由意思だけではなく、天の大きな意思が働いて、地上で色々な現象が起こっている。」

聖書は、天の決定が地上の栄光・栄華を決定している事を説明するために、今天でどんな事が起こっているのかを語るのです。

黙示録4章には3つの存在が登場します。①天の王座/御座に座っている方。②24人の長老。③4つの生き物。4章をざっくり言うと「24人の長老と4つの生き物が、天の御座に座っている方を礼拝している。」この部分をもう少し具体的にイメージするために、①御座に座っている方とは誰なのか？②24人の長老とは何を指しているのか？③4つの生き物の正体は何か？を考えたいと思います。

①御座に座っている方とは誰なのか？

黙示録4:2 たちまち私は御霊に捕らえられた。すると見よ。天に御座があり、その御座に着いている方がおられた。

御座に着いている方、第3の天/パラダイスの王座に座っている方は創造主なる神・父なる神です。

その理由は、御座に着いている方に向かって語られている8節の言葉。

黙示録4:8 「聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者。昔おられ、今もおられ、やがて来られる方。」

はっきり書いてある。御座に着いている方は主なる神、全能者。だから、父なる神の事です。

でもそれだけではなく、黙示録には、創造主なる神様が特別な紹介の仕方では表されるんですね。

黙示録4:3 その方は碧玉（へきぎょく）や赤めのうのように見え、御座の周りには、エメラルドのように見える虹があった。

私、宝石や貴金属に一切関心ないんです。見てたら眠くなります。女の方はピカピカ光る物に憧れたり、深海魚のチョウチンアンコウみたいに「パクっ」ていかれたりするんですけど、僕は今のところ、何の関心もない。だから、宝石でたとえられるとチンプンカンプンになるのですが、ここでは「その方は碧玉や赤めのうのように見え」と書いてあるからたとえです。「その方は碧玉や赤めのうであった」と書いてあったら、神は鉱物で出来ている。「神は、触ってみたら硬かった」みたいな。

聖書は、基本的には全部字義通りに読まなければなりません。ユダヤ人と書いてあったらユダヤ人。144,000人と書いてあったら144,000人。1260日と書いてあったら1260日であって1260年じゃない。韓国系のカルトで、聖書を比喩的に読んで、自分の好きなように勝手な解釈するのがありますが、これは聖書を読んだ事にならない。

少し前に紹介した事があるかもしれませんが、雑誌で読んで覚えている事です。

ある人が友人と待ち合わせしていて、友人が遅刻した。「遅かったな。」「ペット捨てて来てん。」その人、チワワを飼っている。「ペット捨てて来たって、せめて、誰かに引き取ってもらえよ。」「引き取ってくれへんよ、あんなもん。」「あんなもん？ どこに捨てて来たん？」「スーパーの前や。」「スーパーの前？ アカンやろ！」「アカン事ないよ。スーパーの前に、ちゃんと引き取る所あるんや。処分してくれる器械があって、そこに入れたら潰してくれるんや。」よう話聞いたらペットボトル。

「ペット捨てて来た。」話し手は「空のペットボトルをスーパーの処分の箱に捨てて来た」と言っているけど、聞いている方は「飼い犬のペット」。

会話しているようでも、単語が意味している内容がすれ違っているのだから、分かり合った事にはならない。

言い手と聞き手が同じ理解に立ってないと、会話しているようで通じていない。

それは聖書についても言える事であって、聖書に書いてある事を、書き手と読み手が同じ意味に取らない限り、分かった事にはならないんです。書き手が思いもしないような事を、勝手に比喩で当てはめて「ああなのか・こうなのか」と千回読んでも、読んだ事にならない。

だから、字義通りに読むところは字義通りに読み、たとえで出て来る時は、自分のイメージの意味解釈ではなく、そのたとえは聖書の他の箇所でもどのように用いられているかを、さかのぼって知らなければならないんです。

黙示録を導いた神は、読者が黙示録以外の聖書に精通している事を前提として黙示録を書いています。

その方は碧玉や赤めのうのように見え。つまり、聖書の中に碧玉や赤めのうが、何回も前もって出ている。碧玉や赤めのうが、どの箇所・どのシーン・どんな使い方・どんな意味かを知っている人には「ああ、あれね」と分かるけど、旧約聖書と、新約聖書で黙示録以外を読んだ事のない人は、勝手に考え、勝手に解釈するんですね。それは、聖書を読んだ事にはならない。

碧玉や赤めのうが続けて出て来る箇所は、旧約聖書の出エジプト記。

旧約聖書の中で、全ユダヤ民族の代表として、年 1 回神の前に執り成しの祈りをする、神主のトップみたいな人がいました。大祭司（だいさいし）と言って、神とユダヤ人を繋ぐ仲介者の役をする人です。大祭司は特別な衣装を着る事が義務づけられていました。その衣装は非常に目立つもので、一際目立つのは胸当てでした。胸当てには 12 種類の宝石が埋め込まれており、12 種類の宝石一つひとつに、イスラエル 12 部族の部族名が 1 つずつ刻まれています。

つまり、12 種類の宝石を胸に載せて、胸に当てて神に近づく事で、「私の心はイスラエルと一体です。私の心はイスラエルの事で支配されて、イスラエルでいっぱいです。イスラエルの代表として、私の心であなかに近づいて、あなたに献げます。」

その胸当てを再現しているイスラエルの過激派の団体が神殿再建財団。僕は、ここのトップに 2 回インタビューした事があります。前も言った事がありますが、このトップの秘書の名前がバテシバ。ピンと来ない人は聖書を読んで下さい。これはここで買ったカレンダーで、大祭司の胸当てのカレンダー。（胸に当てて）こういう形なんです。

横 3 列・縦 4 列で 12 種類。ヘブライ語は右から左に書くので、横第 1 列の右から始まって、各列右からの順番。1 番目の宝石が赤めのう。12 番目の宝石が碧玉。

聖書では、最初と最後・最後と最初、2 つ並べたら、その間に含まれている全部を意味する表現があります。

例えば、「善悪の知識の実」とは善と悪の知識だけじゃなく、善から悪に至るまでの全ての知識です。「ダンからベエル・シェバ」はダンとベエル・シェバ 2 つだけではなく、その間にある全ての土地です。「碧玉と赤めのう」と言う事で、ユダヤ人の全部族に、神様の栄光を反映するための使命があった。それらを代表するものが宝石だったのです。その方は碧玉や赤めのうのように見えたという事は、恐らくはそう考えていいでしょう。

天にいる神はイスラエルの神。世界中のクリスチャンが言う創造主なる神は、アブラハム・イサク・ヤコブの神。天の創造主なる神はイスラエルの神です。だから、イスラエルの神・イスラエルの文化の中で語られて来た旧約聖書を理解しようと思うなら、やはりそこに立たないと駄目だし、その部分をすっ飛ばして、ただ「創造主」というように異邦人的な思考で考えていたら、異邦化された神様にズレて行くかもしれない。

聖書はヘブル的視点というか、旧約聖書の事も一つひとつよくわきまえながら解釈して行く事が、すごく大事ではないかと思います。

そして最初と最後ですが、黙示録の中に「わたしは初めであり、終わりである」という言葉が 4 回出て来ます。これは神の自己紹介。「わたしはアルファであり、オメガである。」「わたしは初めであり、わたしは終わりである」「最初であり、最後である。」

わたしはアルファであり、オメガである。ギリシア語のアルファベットの最初がアルファ（ $\alpha$ ）、最後がオメガ（ $\Omega$ ）。だから、その間の全てのアルファベットが入っています。更にギリシア語は、全てのアルファベットで、全ての単語と文章を作る事ができるんです。神の全ての御心は、イエス・キリストというアルファであり、オメガである方によって、完全に啓示されるのです。

同時に初めであり、終わりである方なので、この方には始まりがありません。

世界の始まりを起こした方は、この方自体は存在しなかった時がない。つまり、永遠の存在。

「永遠の存在」と言ったら何をイメージしますか？ ある方は「宇宙だ。宇宙は永遠に膨張しているから永遠の存在。」違いますね。宇宙は存在しなかった時がありました。ある時から存在したので、その一点で、永遠を語る資格はありません。

本当の意味の永遠の存在は、全宇宙を造り、あなたを造った神だけです。全宇宙の創造主・全ての全てである方の事を「**碧玉や赤めのうのように見えた**」の一言葉で語っている。でも、**碧玉や赤めのう**の文化的背景が分からなかったら、説明してくれているその説明が、却って分からなくなってしまうんです。

**黙示録 4:3 その方は碧玉や赤めのうのように見え、御座の周りには、エメラルドのように見える虹があった。**

普通7色の虹って7色に見えますか？ 文化圏によっては5色・3色、色々あるそうですね。

**エメラルドのように見える虹**は**エゼキエル書**にも出て来ます。が、聖書で**虹**が最初に登場するのは「**ノアの大洪水**」の後です。人間の墮落がピークに達した時、神は1度全人類を滅ぼしました。大洪水で。水によって全人類を裁いたのです。しかし、その裁きで、8人だけ箱舟に入って助かったんですね。

ノアの箱舟は非常に大きくて、私は今年10月、ノアの箱舟の実物大模型をアメリカまで見に行きます。旧約聖書のノアの箱舟の設計図に従って造られた3階建てのノアの箱舟。そこには、進化論では説明がつかない、神が世界を造られたという創造に基づく説明の科学館があるんです。行って来たら、またご紹介したいと思います。

箱舟は8人以外入れないギュウギュウ詰めではありません。ぶかぶか。まだまだ入る余地があった。ノアの大洪水以前は雨が降りませんでした。雨がなくても地球は潤っていたんです。なので、大洪水が来ると言っても、人々はバカにして入らなかった。信じた彼ら以外は、皆裁かれてしまいました。その裁きの後で、神は「わたしは二度と水で全人類を滅ぼさない」という事の証しとして**虹**を見せたと書いてあります。

つまり**虹**は、「人類は二度と水によっては滅びない」という平和の象徴・神は契約を守って下さっているという事の象徴なんです。神はこの契約を本当に守っています。だから、今までどんなに人間が墮落しても滅ぼさないんです。どんなにえげつない害悪・残酷な事・悲惨な事が世の中に横行して、今ある国に行ったらメチャクチャでしょ。人権も何もあったもんじゃない。でも神は介入せず、裁きを行わずに留めています。契約を守っている。**虹**は、水で滅ぼさないというしるしです。

同時に**虹**は、1度水で滅ぼした裁き主なる神の実行を思い出すためのものでもあるのです。なので、**エメラルドのように見える虹を見た**というのは、間もなく神が決意して、水ではなく火で、この世界を裁く時がやって来る。全知全能で全てを造った方だけど、同時に裁き主としての神がここに描かれている、と言って良いと思います。

**黙示録 4:5 御座からは稲妻がひらめき、声と雷鳴がとどろいていた。御座の前では、火のついた七つのともしが燃えていた。神の七つの御霊である。**

**御座からは稲妻がひらめき、声と雷鳴がとどろいていた。**これは、モーセの時代に、神がシナイ山に下りて来られた時の情景とそっくりですね。大きな啓示を語ろうとされている時です。

**御座の前では、火のついた七つのともしが燃えていた。神の七つの御霊である。**

御座の前には、御座からピッタリくっついて離れない**七つのともしび**があって、それは**神の七つの御霊**である。これは聖霊。聖霊は神の霊。**七つの御霊**とは、聖霊が7つあるというのではなく、完全な働きをするという意味。この説明は既にやりました。「えっ、やったかな?」是非バックナンバー調べて下さい。

この講壇の前に4つのスポットライトが埋め込まれています。皆さんからは見えないけど、こっち向いている。冬はいいです。暖かい。大阪の夏は体温より暑い。その時、これを浴びると死にそうになります。暑い!でも、よく見えるようにと言う事ですね。舞台が始まると、人々の目が主役に注目するように、その人にスポットライトが向けられます。周りが真っ暗で、その人にのみ光が当たると、観客は皆、その人にのみ注目しますよね。

**御座の前に7つのともしび**があったと言うのですが、**ともしび**は明かりです。スポットライトです。つまり聖霊は、人の心に神を際立たせて、明らかにする霊なんです。聖霊が働いて下さらなければ、神を理解する事はできないし、聖書の言葉を理解する事はできないし、イエス・キリストを信じる事はできません。

**7つのともしび**は御座におられる方を照らしています。御座におられる方に注目させる働きをしているように、聖霊は、霊的に盲目の人間の心に、「神は本当におられる・神は生きて働かれる方」という事を理解させるために働いて下さる方です。なので、「ずっと聖書の話の話を聞いているけど、神がおるか分からへん」「聖書の意味が分からへん」「メッセージがよう分からへん」「信じようと思っても信じられへん」と言う方は、神に祈って下さい。「神様、どうぞ私の目が開かれ、神がおられる事が分かるように助けて下さい。」神は賜物として、理解や目が開かれるという事を与えて下さいます。

そもそも聖書は、人間が普通に読んで分かる本じゃないです。**イザヤ書**で「天が地よりも高いように、神の考えは人の考えよりも高い。天と地がいつまでも交わらないように、人の発想と神の発想は全然交わらない。人の考えと神の考えは違う。神の考えは人よりもはるかに高いんだ!」と言っています。なので、聖書を**創世記**から読んで、「これも私が前から思ってた事や。」「これも前から思ってた。」「これ、全部私の考えと一緒に」と言う人がいたら、その人は神です。

人と神は違うと書いてある。違うのに、なぜ分かるんですか? 聖霊が教えて下さる時だけ分かるんです。私にはお手上げだ。「だったら、神に頼ろうではないか。祈ろうではないか」と促して下さる。神とは、全ての全てである永遠の神。そして裁き主でもあり、聖霊によって、私たちにご自分を啓示する事ができる方。これが、①**御座におられる方**です。

②24人の長老とは何を指しているのか? これは結論部分で紹介したいので、ちょっと飛ばします。

2番目は、③**4つの生き物**の正体は何か?

**黙示録 4:6** そして、御座のあたり、御座の周りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。

**前もうしろも目で満ちた**って、昨日の夜ちょっと描いてみて、気持ち悪くなりましたね。どう見ても水木しげるの世界ですよ。でも、そんな取り方をしてはいけない。「非常に洞察力が優れている・全てのものを見渡している」という事です。

**四つの生き物**には特徴があります。

**黙示録 4:8** この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りと内側は目で満ちていた。そして、昼も夜も休みなく言い続けていた。「聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者。昔おられ、今もおられ、やがて来られる方。」

これを読んで「ああ、あれか!」とピンと来た人は、旧約聖書を読んでいる方です。これを読んで益々分からなくなった人は、旧約聖書をご存知ない方。

旧約聖書に**イザヤ書**という預言書があって、非常におびただしく・詳しく、やがて来られるメシア・キリストについての預言を語っています。ある方は「第5の福音書はイザヤ書だ。」

新約聖書に**マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ福音書**の4つの福音書があって、イエス・キリストの伝記というか、この方がなされた事が記録されています。

**イザヤ書**はキリストが来る700年前に、やがて来られるメシアについて、非常に詳しく書かれた書です。**イザヤ**はある時、天の光景を幻で見せられました。「御座に座っている方の周りに、セラフィムという御使いがいた。セラフィムは6つの翼を持っていた。その内の2つで顔を覆い、2つで足を覆い、2つで飛び懸けりながら、セラフィムはこのように礼拝する。『**聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる。(イザヤ6:3)**』」

**黙示録4章の4つの生き物**は**6つの翼**を持っている。その生き物たちは「**聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者**」と。**イザヤ書6章**でセラフィムが礼拝している言葉とそっくり。なので、**イザヤ書6章**の知識を持っている人がここを見ると「ああ、セラフィムの事か!」と理解するんです。

因みに、御使いの中で「翼がある」とはっきり書いてあるのは、セラフィムとケルビムという御使いだけです。一般の御使いには翼はありません。翼がある御使いの絵を散々見ますね。

例えば、森永製菓のロゴマーク。ピポピポッ! 森永製菓の創業者はクリスチャン。だから、天使が森永のMを掴んで、逆立ちしているのがロゴマークですよ。社歌は「だ一れもないと思っけても、どこかでどこかでエンゼルが♪」見てるで。御使いが見てるで。そんな言い方じゃないけど。

でも、聖書の中で翼を持っているのはケルビムで、最高位の御使いです。セラフィムも6枚の翼を持っている。夢や、或いは新興宗教やカルトが「御使いが」とか言って、御使いの刺青を彫っている人を見たら、これは完全に妄想。彫った後で申し訳ないけど、それは妄想ですわ。聖書的じゃない。

ただ、**イザヤ書6章**にないセラフィムの特徴が出て来るんです。この**4つの生き物**は、それぞれ非常に特徴的な姿をしていました。

**黙示録4:7** 第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は飛んでいる鷲のようであった。

**エゼキエル書**のケルビムがこの姿。だから「セラフィムだ。それ以外あり得ない」と断言する事はできないけど、私はセラフィムじゃないかなと思っけている。その程度に留めたいと思っけています。

ここで注目したいのは非常に印象的な姿です。①の生き物は**獅子/ライオン**のような姿。②は**雄牛**の姿。③は**人間**のような顔。④は**鷲**の姿。これは何なのか? 実は、先程紹介した4つの福音書、**マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ**はそれぞれ、この特徴を持った**イエス・キリスト**を紹介しているのです。

**マタイの福音書**の**イエス・キリスト**のテーマは、ユダヤ人の王としてのキリスト。**獅子/ライオン**は百獣の王で、力強さのシンボル。

**マルコの福音書**のテーマは**雄牛**。牛は黙々と従順にしもべとなって働いて、畑を耕し、ミルクは飲み物。そして、いけにえとして最も高価で美しいのは羊ではなく雄牛。これはしもべ、しもべとしての優しさ・謙遜を表しています。

ルカの福音書は完全な人間としてのイエス・キリスト。人の子としてのイエス・キリスト。完全な人間とはどんな人間か？ それはイエス・キリスト。この人間には、他の動物にはない賢さ・知恵があります。動物が絶対になかない知恵を持っています。

ヨハネの福音書は驚。神の子としてのイエス・キリスト。昔聞いた話ですが、驚は太陽を直視しても目が潰れない。神の栄光を直に見ても滅びない。神と面と向かって対する事ができる。だから、ヨハネの福音書は他の3つの福音書と少し違うんです。3つの福音書には、イエス・キリストが地上生涯を歩む時、「父/神に祈った」という言葉が頻繁に出て来ますが、ヨハネの福音書には「祈った」という言葉が1回も出て来ない。祈りは神にする事で、神の子がご自分の父なる方に呼びかけるのは祈りではなく対話・呼びかけ。「父に言われた。」なので、神の子としての福音書がヨハネの福音書。これは気高さ。

この4つの生き物は、イエス・キリストによって現される神の偉大さの一部を反映するものとして造られています。1人の御使いが全部を現す事はできない。どんなに完全な御使いも、神の麗しさの極一部しか反映する事ができない。でも、その一部だけでもすごいんですね。

もし誰よりも力強く・誰よりも優しく・誰よりも賢く・誰よりも気高い方がいたら、その人と知り合いになりたいと思いませんか？「こんな問題、どうしたらいいんだろう？」誰よりも賢い方がアドバイスしてくれたら、どんなにいいか。「もう、私立ち上がれないよ。もうダメ。」誰よりも力強い方がサポートしてくれたら、どんなに頼もしいか。「もう、心が苛立って。」誰よりも優しい方が、自分のふがない人生を慰めてくれたら素晴らしいじゃないですか。「神といっても、目に見えないから分からない。」イエス・キリストの中に、神の気高さがあるんですよ。

全ての人が力強く・優しく・賢く・気高いものを求めていると思いますが、これは全部イエスの中にあるのです。つまり、人の心を完全に満足させる事ができる・うっとりさせる事ができる・人間が求めて止まない全ての答えや良いものは、全部イエスの中にある。だから、キリストを知らない事は非常に大きな損失だと思えます。この方を知るという事が、何よりも素晴らしい事なんですね。

これは私の想像なので、どうかな?と思う方は、どうかな?と聞いてもらったらいいのですが。**黙示録 4:8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りと内側は目で満ちていた。そして、昼も夜も休みなく言い続けていた。**

天に夜があるんですか？ 夜は闇の時間です。太陽が上がっている時間は昼。日没になったら夜です。地上では夜昼夜昼と交互に出て来るけど、栄光の神がおられる第3の天/パラダイスに夜が来るんですか？ 夜は闇ですよ。天国に闇があるんですか？ 私は無いと思えます。

だけど、**昼も夜も休みなく言い続けていた。昼も夜も**というのは、4つの生き物は地上の人類歴史を見ているんです。こんなにも愚かしい歴史・こんなにも悲惨な歴史・こんなにもえげつない戦争。全部ずーっと見ながら、それでも人間を愛し続けている神を見て、「すごい！ 聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者。昔おられ、今もおられ、やがて来られる方。」

**黙示録 4:9 また、これらの生き物が栄光と誉れと感謝を、御座に着いて世々限りなく生きておられる方にささげるとき、**

これ、何に感謝しているんでしょう？ 人間への手厚い対応の仕方を見る事によって、神の優しさ・偉大さを教えられて感謝なんですね。だから、「昼夜となく」という事だと思えます。

さて、いよいよ3番目。24人の長老とは何を指しているのか？

黙示録4:4 また、御座の周りには二十四の座があった。これらの座には、白い衣をまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老たちが座っていた。

24人は、これも旧約聖書に出て来るんです。だから、旧約聖書を知っていると「ああ、あれかな」となる。どこに出て来るかという、イスラエルが黄金時代を迎えていた時代。ダビデーソロモンの親子の王様が治めていた非常に素晴らしい時代。

この時イスラエルには、神にいけにえを献げたり、執り成したりする祭司たちが、少なくとも数千人いました。彼らの職場は基本的には神殿。神殿ができるまでは幕屋です。ダビデは幕屋時代・ソロモンは神殿時代。幕屋にしても神殿にしても、何千人もの祭司が一気にそこに入って働く事はできません。狭すぎ。そこで、数千人の祭司たちを24組に分けたんです。そして、1組に1人ずつ、代表の祭司を立てました。代表の祭司たちが全員集まったら24人ですが、彼らは全祭司を代表する者であり、同時に、祭司はイスラエルの代表なので、全イスラエルの代表になるのです。

つまり24人とは、ある共同体・集団の代表を表します。24人の人たちで表されるある共同体とは、すなわち教会の事です。教会はイエス・キリストを自分の救い主として信じた人たちの群れで、これを24人の長老と言っているのです。

なぜそう言えるのか？これは次回の事ですが、今回はまた寄り道すると思うので、5章を見て下さい。黙示録5:9-10 彼ら（24人の長老）は新しい歌を歌った。「あなた（イエス・キリスト）は、巻き物を受け取り、封印を解くのにふさわしい方です。あなたは屠られて（十字架の上で屠られて）、すべての部族、言語、民族、国民（くにたみ）の中から、あなたの血によって人々を神のために贖い、私たちの神のために、彼らを王国とし、祭司とされました。彼らは地を治めるのです。」

2017年版は大抵優れた翻訳だと思いますが、この箇所は良くないです。

実は、聖書の原本は存在しません。最初にヨハネが書いた「ヨハネの黙示録」はどこにも存在しない。しかし、それを書き写したものを写本と言って、新約聖書の写本は約2,500あります。その中で、特に現代の聖書学者たちが注視するのは、世界三大写本と言われている写本です。その内の2つの写本、及び他の2,500の写本は、そのように書いてないのです。

すべての部族、言語、民族、国民の中から、あなたの血によって人々を神のために贖い、私たちの神のために、彼らを王国とし、祭司とされました。彼らは地を治めるのです。

2017年版は「彼ら」になっている。それだと、全世界の国民から、キリストの血によって贖われた・贖い取られた人たちは、この長老たちではない他の誰かになってしまう。世界三大写本の中の『アレキサンドリア写本』、大英博物館にあります。それだけがここを「人々」と訳しているのです。

その他の全部の写本は「私たち」と言っています。

すべての部族、言語、民族、国民の中から、あなたの血によって私たちが神のために贖い、私たちの神のために、私たちが王国とし、祭司とされました。私たちは地を治めるのです。

すべての部族、言語、民族、国民の中から、あなたの血によって私たちが神のために贖い

全ての部族、言語、民族、国民の中から、キリストの血によって贖われた人たちとは、教会以外他にありません。国語を超え・国境を越え・民族を超え・人種を超えて、白い人も黄色い人も黒い人も関係ない。

イエス・キリストを信じた全ての人たちは、キリストの血によって贖われた。世界中から集められたその贖われた人たちが、**私たち/24人の長老**という事になるのです。「**私たち**」が正しい。

という事は、この **24人の長老**とは教会です。教会はどこにあるんですか？ **天の御座の周りに24の座**があると書いてある。つまり、天の教会なんですよ。「24人の長老は教会を表している。しかも、地上の教会ではなく、天に引き上げられた教会である」という事です。

黙示録で患難時代は **6章**から出て来ます。今は **4章**で、まだ患難時代に入ってません。患難時代に入る前に、教会は天にいるという事。この一点をもって、教会は患難時代に入らない。

「教会も患難時代を通して試練を受ける」と言われる方々もいますが、聖書を字義通りに読めば、「教会は患難時代の前に、天に引き上げられている以外にない」と私は考えています。

**黙示録 4:4 また、御座の周りには二十四の座があった。これらの座には、白い衣をまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老たちが座っていた。**

**白い衣をまとう**とは、「キリストの血によって真っ白にされた」という意味があります。**黙示録 7:14** に白い衣の意味が書いてあるので、後で見えておいて下さい。聖書で、黙示録の中で「何だろう」と思ったら、前後に必ず説明が付いています。

つまり、キリストの血によって、神様から見ても真っ白な状態に見える・完全に罪赦されたという事です。

21世紀元年に「世界で最も偉大な広告コンテスト」というので、20世紀の有名なポスターを全部集めて、どれが1番いい広告かを世界中で調査しました。ぶっちぎりで1位になったのはフォルクスワーゲン。1961年、フォルクスワーゲン社のビートルという車。スタイル・デザインが斬新だし、すごく人気があったんです。ビートルのモノクロ写真があって、その下にコピー文句がひと言。「欠陥車？」ドイツ語で。機関車じゃない。「欠陥車？」その下に、ちょちょちよとちっちゃい字で、「この写真のビートルは、車内の小物入れのふたの部分に汚れがあったため、品質検査に於いて欠陥車となりました。汚れを見つけて、このビートルを不合格にしたのは、ドイツのヴォルフスブルク工場で働く3389人の検査員の一人です。」

いいですか？ このビートル、エンジン;オッケー。ブレーキ;オッケー。シャーシー;オッケー。窓;オッケー。全部オッケー。ただ、小物入れのふたが汚れていた。しかし「我がフォルクスワーゲン社は、この汚れを見逃しません！うちの品質管理はここまで徹底している。このフォルクスワーゲン社が合格証を与えている製品は絶対に完璧です。」損して得取れ。「僅かな汚れも見逃さないという厳しい品質管理をクリアしている我が社の製品は、どこに出しても恥ずかしくない。押しも押されもしない最高の車です！」

私たちの良心に照らすと、「これくらいの罪はええやろ。」「これくらいの過ちは大目に見てもらえるやろ。」  
「これは不正かもしれないけど、大抵の人はやってるやろ。」人間のだらしない良心では罪の内に入らない事であっても、神の目に見逃しはしない。神様はどんな方かというと、**聖なる、聖なる、聖なる方**。聖い方。罪を徹底的に憎む方。「僅かな罪を見逃す事のない神の目から見ても真っ白だ。」

**白い衣をまとう**とは、「完璧な罪の赦し」という事なんです。

ある人は、クリスチャンになるというのは、自分で努力して、罪を犯さないように修行して、一生懸命に掟・ルールを守って、あれしたらあかん、これしたらあかん。頑張って頑張って、遂に罪を犯さないような人間になって、クリスチャンデビューって、そんな日は永遠に来ません。やればやるほど無理だと分かります。

人間は、自分で自分を救う事ができない。だから、私たちの代わりに罪の償いをして下さる方・私たちをご自分の完璧な生涯で覆って下さる方（覆うとは贖うという意味です）キリストが私たちを贖って下さるので、私たちは**白い衣を着て**、神の前に堂々とする事ができるのです。  
彼らはその**白い衣を着て**いました。立派だったんじゃないです。キリストを信じたんです。

**白い衣を着るとは、黙示録 3:4** **しかし、サルディスには、わずかだが、その衣を汚（けが）さなかつた者たちがいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らがそれにふさわしい者たちだからである。**

**サルディス**は宗教改革時代の教会だと以前説明しましたね。サルディス教会の人たちに向かって、「大半は救われていないクリスチャンだが、**わずかだが、その衣を汚さなかつた者たちがいる。彼らは白い衣を着ている。**」**白い衣を着ているのはサルディスの教会。**すなわち人間/クリスチャンです。

「24 人の長老は天使たちだ」という解釈があるけど、天使は白い衣を着ません。サルディス教会に言われているのです。

**黙示録 3:21 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせる。**

これはラオディキア教会。天の座に着くと約束されているのは人間です。御使いではない。

「ラオディキアの救われたクリスチャンを**わたしの座に着かせる**」とここで約束しています。

それを受けて、**黙示録 4:4** **また、御座の周りには二十四の座があった。これらの座には、白い衣をまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老たちが座っていた。**

前後の文脈を見ると、教会に当てて言われている事がここで実現しているので、**24 人の長老**は教会です。

そして「**金の冠**」の「**冠**」は王冠ではなく、勝利者がもらう冠。「ステファノス」と言います。

今王冠は評判悪い。コロナウィルスのコロナは王冠という意味ですね。

勝利の冠は植物の葉で編込まれます。月桂冠というお酒のロゴマーク、ご存知ですか？ 月桂冠という文字を月桂樹の葉が困っている。これを乾燥させるとローリエ。いい香り。時々スパゲティに入ってる。

あれを頭に。勝利者や非常に優れた詩人は、月桂冠を被らしてもらえるんです。そういう詩人を月桂冠詩人。そこから来たんかと。そやねん。

「**勝利を得る**」。7 つの教会の締めくくりは全部これ。「**勝利を得る者は一をやる**」と書いてあります。つまり、イエス・キリストを信じた事が「**勝利者になる**」という事なんですね。

締めくくりです。

**4 つの生き物が礼拝しているのを聞いた時、黙示録 4:10-11** **二十四人の長老たちは、御座に着いておられる方（父なる神）の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方（父なる神）を礼拝した。また、自分たちの冠を御座の前に投げ出して言った。「主よ、私たちの神よ。あなたこそ、栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたが万物を創造されました。みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです。」**

**世々限りなく生きておられる方を礼拝した。**天では神を礼拝している。

随分昔、伝道旅行に行って、あるクリスチャンのお家に泊めてもらいました。今は殆どホテルですが、当時は家に泊めてもらうという習わしで、それはそれで楽しいけど、問題は中々寝さしてくれない事。

そこに、親に反抗する高校 2 年生がいました。素晴らしいクリスチャンホームだけど、お父さんと馬が合わない。「父は『教会来い。礼拝出ろ。神を信じないなら人生無意味だ』と言うけど、僕はそんなの思

いません!」夜私の部屋に「コーヒー持って来ました。」「ありがとう。」で、帰れへんねん。立ったまま「僕の意見、どう思いますか?!」

今でも覚えているのは、「世の中には、クリスチャンでなくても、神を信じなくても、輝いて生きている人って幾らでもありますよね。」例えば? 「スティーブ・ジョブズ。あの人は神を信じてないけど、彼を見ると、何かほんとにワクワクする。あんな便利な物を作って、生活を一変させて、革命家みたいで素晴らしいですよ! 彼は神様を信じてない。何で、神を崇めないでダメなんですか? 崇めなくてもちゃんと成功してるじゃないですか!」

なぜスティーブ・ジョブズに傾倒するのか聞くと、「素晴らしい物を作ったじゃないですか。高原さんも iPhone 持ってるでしょ?」「持ってるけど。素晴らしい iPhone を作ったという事でスティーブ・ジョブズを崇拝してるけど、そんな頭脳を持った人間をお造りになった神様を素晴らしいと思うのは当然じゃないの?」と言ったらね、「プロは手強いな」って。クリスチャンにプロもアマもないんですよ。

「礼拝って、神様は素晴らしいとか言うけど、神ってそんなにチヤホヤされたいんですか? 僕は友達に親切やいい事した時、ありがとうと言われなくても、チヤホヤされなくても、何とも思いませんよ。神様は、そんなにペコペコされたいんか?!」と。「いい質問だね」言いながら、頭の中で「何をっ!」神の偉大さをどこで教えられるかということ、威張っているうちは、神様の本当の素晴らしさは分からないんですよ。

トールバルセンという彫刻家を作った『昇天のキリスト』。イエスがオリーブ山から天に引き上げられて行く像ですが、実際に見た人は皆失望します。大した事ないから。しかし作者は、昇天のキリストなので、この像を見る人が、下から見上げた時に 1 番魅力的になるように作っているんです。だから、キリストと同じ目線に立って見ると「何なん、これ。うつむいてるやん。」でも、その像の前で跪いて下から見上げると、何とも言えない神々しい姿になる。

へりくだっている人にだけ見えて来る神の新しい発見があるんです。礼拝する時にだけ気づく事ができる神の魅力があるんです。人間が礼拝しなかったら神様は空しいとかそんなんじゃない。神は自己充足されている。そんなんじゃないですよ。礼拝ですら、人が神の恵みや偉大さを知る管です。

ここで、[昼も夜も休みなく言い続けている 4 つの生き物](#)と声を合わせて、「[主よ、私たちの神よ。あなたこそ、栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方](#)」と言っていますが、なぜそんなに言えるのか? クリスチャンが、昼も夜も常に「神様は素晴らしい!」とできたらいいけど、口では言えても、心がついて来ない時がありますよ。「神様は素晴らしいzzz」。寝てしまうとかね。僕は、天でする礼拝は地上とは違うと思う。

昔、この集会のクリスチャンのご親戚が香川県の観音寺(かんのんじ)でブティックされていて、お見舞いというか、キリストの話をするために行きました。一緒に付いて来てくれた人が「折角だから、名所案内しましょう。」瀬戸内海に面していて、公園みたいな所。突然、土俵みたいな直径 140m くらいの砂場みたいなのが出て来て「すごいですね。」何もすごい事あらへんけど。退屈や。「それより弘法大師の事、知りたいわ」と思って。

その砂場の隣にある琴弾(ことひき)公園。山になっている。山頂に登って「さっき見た砂場を見て下さい。」見たら、寛永通宝(かんえいつうほう)だったんです。周囲 345m。

寛永通宝は銭形平次(ぜにがた へいじ)が投げる銭(ぜに)。銭形平次の作者・野村胡堂(のむら ことう/1882-1963)はクリスチャンですよ。彼は銭形平次を書く時、バツハをかけながら書きました。

「時代劇は人を斬るから嫌や。斬られた侍にも家族がおるんやぞ。」銭形平次は人を斬らない。パーンと銭投げて。そんなんで解決するんかい?

銭形平次が使っていた寛永通宝を砂場に描いた銭形砂絵公園。それを下で見ていても全然分からない。でも、高く上げられると「あ、銭形平次の寛永通宝や。」意味が分かるんですね。

「神様が愛なら、何でこんな事があんなねん?」「神様が公平なら、何でこんな不公平がまかり通るのか?」「何でこんな戦争が?」「何でこんな不条理が?」「何でこんな独裁者がのうのうと生きてんねん?」とかあるじゃないですか。この地上で生きている限り、なぜそれが許されているのかは分かりません。

でも、黙示録 4:11 **あなたが万物を創造されました。みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです。**

**みこころのゆえに存在**しているものの中には、御心に反している悪者もいるんです。「御心にかなうもの以外は存在できない」と言うんだったら、この瞬間に全員消滅しますよ。

あからさまな悪・独裁者・恐るべき力があります。それらを**御心のゆえに**、ある時存在させる。

私たちは短いスパンでしか分からないから、「神が正しいなら、何でこんな事許すねん?!」となる。

でも、天に行ったら、なぜそうだったのかという舞台裏が全部分かるんです。その時、神様の賢さが改めて分かって、礼拝が途切れないんですよ。「あの事もその事も、あれもこれも全部意味があって、間違いはなかったんだ!」。

そうとは知らずに、地上にいた時「神様、なんでやねん? 説明して!」って言うた。説明されても、私たちには分からへんねん。

善悪の問題・なぜ悪があるのか? 神様には答えがあります。でも、それを地上の人間に説明するというのは、コオロギに微分積分を教えるようなものです。「リリーンリリーン。インテグラル(積分)? そんなん知らんわ。」ほんまに。いや、もっと差があると思うわ。

神は分かっているけど、聞き取る私たちの側に理解する能力がないんです。しかし、天に行ったら、「そういう事だったのか!」と全部分かって、途切れなく神様を賛美する理由がなくなる。

その時、自分の人生の意味や完結を知って、みんな満足するのです。

皆さん、そこに行って、もう1度人生を眺めたいと思いませんか? 神は、そこに行く資格を与えるためにイエス・キリストを遣わして下さいました。

是非、イエス・キリストを自分の救い主として信じて下さい。救われます。是非、キリストに行って下さい。そして、これから神様が計画している事がどんなに素晴らしい事なのか、一緒に学んで行けたら幸いです。

最後まで、ご清聴ありがとうございました。

どうぞ、イエス様を信じて下さい。心からお勧めしたいと思います。

\* 動画は YouTube で「**HCA 東住吉キリスト集会**」検索。ぜひ見て下さい。

\* ラジオ番組「**聖書と福音**」(15分)も是非どうぞ。スマホでいつでも聞けます。YouTube もあります。

動画筆記 : Rumi

